濫觴無底抄

梅の巻

特別
へ12
1077
33

早稲田大學圖書
利
1077
32 33

梅枝

卅九歳　太政大臣

春宮御元服可為二月　明石御裳

着同前事

正月廿日源氏君合薫物給事

二月十日兵部卿宮六条院給事

槿斎院薫物花源氏給事　瑠璃盃二付梅枝

御方々合薫物各被奉　源氏兵部卿宮

判給事

特
へ12
1077
33

斎院黒方　源氏侍従　紫上梅花
花散里荷葉　明石上薫衣香方
絵殿合物意趣給事　明朝兵部卿宮文添給ども
明石姫君御裳着ども於六条院中宮御方
有此事
廿余日東宮御元服事
明石姫君入内延引四月ども
御調度ども御草子ども
諸方〻手本事

源氏書草子ども
兵部卿宮参六条院給事
宮源草子持参給ども
人〻手本事
兵部卿宮召寄嵯峨帝古万葉
集延喜古今集示給ども
内大臣殿思煩雲居雁姫君事
源氏君教訓御子宰相中将給ども
内大臣夕霧与雲居雁詠給　時分付夕霧

宰相中将有御書事
女房ゟ返事

梅枝　以詞為巻名
抄 巻名以詞書之
河 巻名薫物合之後弁ノ少将取ニ拍子ヲ
欲ニ梅ノ枝ヲ
む 梅ノ枝ハ催馬楽ニとうたへる事也
秘 原廿九才正月の事也 む
寿 源氏廿九

御裳着の事　向

向　明石中宮着裳　十二歳

うつほの物語に藤原君にてあて宮十二
までに裳着給ふよしみえ
たり

む　あるじの姫君はいま十二になりたまふ
れはあてにおかしけにをひさきみえて
明石の中宮十二歳にてうつほのあて宮
も十二歳にて裳着の事あるなるへし

へかるらんや

春宮も初はしらゝ紀は成給へり也
こし

秘　向　今上へ　十三歳也

冷泉院春宮時　應和三年二月廿八日

御元服

續日本紀曰　延暦七年甲子皇太子加元

服天皇ハ后並御前殿令大納言従二位兼

皇太子傅藤原綱臣継中納言従三位紀
朝臣船守両人并加冠畢即執笏
拝
も
春宮ハ朱雀院也皇子今年十三也比
元服ハ十五日比ころ下にあるたれ又冷
泉院乃二月廿例を摸せり

やうてはまつりも
明石姫君乃入内し則あるへしと
しやうセ春宮へ
御きぬあゐセ給
源の薫物調合之
大弐のめでたまいらせ
秘 太宰大弐ハ一任五ケ年也そあるか故
まいるくされハ豆両の奉まいへ例大弐そ
ハ貢へるをされと又ま時それまいら
まつると云義もあるへし

弁

秘勅物云大弐ハ必潤色ありてよみ人
やさしと必ス合しの例ハ江帥匡房北
所ゝやまり大学寮乃孔子ノ拈ノ
図とよりまさき

河

樹下集云大入道殿よりききぬあらせて
色てまいり時今乃ふらさまれ中よ
道雅朝臣　　于時大弐
末乃世も運ハなかまり橘のはしれ
色あらん方へ人をやり給ひ

行いの人のあはれおもひてや

抄

新後拾遺北青奥よりまし

おもきあやまちも

青奥よりこし先で錦縫ふ

あさかことみ人ふねのよし

ちりさは志つくひのめ乃おほいしき物
志る様のくし
（は）物霞　敷設　蔄詩文　蔄暢穀
注田蔄虎皮く
くしハ端縁く
あたは代のくしおはるこまりとれ
由てもつりるるおやひこんさ
（は）高麗人　光ほ氏桐しるるへ綾緋
金錦　今まうつけるる締こと
金襴乃新え

延喜八年大使裴璆色く乃物と献ある
中御紀りしみくより
（秘）源と鴻臚館にて相せしはるそ後
つかし物たまふとしひこんさ今
襴るよの類之被金綺とあり於此
金錦ナト書り

はらんしあてはく
その物くくは紗合さる様のはらんし

ちらかつらく

河後羅

こ
む
これさきのおほやけもとめ
所流乃高兼人の来朝せられけるに
まやさきこれおほやけもとめとりて二宋
流乃江へとりとりおほされ深く
木ころ流くるく
昇
大貳の事まゐるく
抄
大貳これ事ある新添の物ともへ
かりとも
抄
沉香也 昇

松云 沉香よりもてハおもくさ
海丸也何

英秘ハ昔今
とりこら(入ハ
古方アメテ(レ)キ
言ヒヲテ

二 くさ流しあつせさ此流へと
抄
何かさ古新さもりて薫物と合と
させ流く
松云薫合丸とりおへてあまハ薫物て
春具とまうちて二粉へて合と新丸
とくり物ん香らめ乃ろく
昔ハ此のさの時乃あり丸

かすりものゝこと
以 織田か細揚着物借入織田揚五百拵之
茅山太平観記
紅とらへ志んでむに
源氏六条院北寝殿にて蓋物なる
なせ給く
かうしの所いましめの御つのちると
以 古本に大納めんまと有頼ふ風まうる
かうまくと展轉書字乃様れそうの葉

和歌とて続あり此物語りも大系
と大かうとも有り是葉行かうま
乃ためいましめとうく人まれ
む 我うまとそんまうと展轉書字様とも
と河海よ以御よてふや玉乃字よ
まの草字よみかしてまれ字よ書く
そ後又まうとよみ為かるらへし
み我うしとそんとよろう事ハ此物語
よ源氏と御かうとの行うり葉此字よ

おんとしある事みえすしひそかにあまた
さんまうとハおもしろく侍つる之承和
ハ仁明天皇此年号之二の方とハいふ
方と侍従との二也

秘
仁明天皇之おほんいましめう
承和　仁明天皇用之

此いましめハ此承和の御事
弁
不伝男子の制おほせ也

秘
黒方　侍従　不伝男子云制禁之
此をいつてハ深く伝ふ人なしと也

同
合香　秘方云為方
沈香　大四両　丁子　大二両　白檀　大一分
丁香　大一両、或大二分加之
麝香　大一分　薫陸　大一分
拾遺方
沈　大四両　丁子　大二両　甲香　大一両
甘松　一両　熟鬱金小一両　一説沈八両香　一説丹黄　熟鬱金

古唐　方

蜜和研合搗三千杵炮甲香以和蜜
塗之令黒黄不得過黒此両種方不
傳男耳是兼和作事也延喜六年二月
三日故典侍滋野直子朝臣獻方之

かやしめて
（ほ）深くすこしくせツノ立青通なるを
うへは　（秘）紫上也

ひんかしの中れたまりてに
（は）放出　一説出居といふ又廂なとゝ

放出事

（ひ）李部王記天暦元年正月二日於太皇太
后御所院相殿ノ西對南放出年數とて
王御座南小對鋪（以西為上）東廂西面南上
數四位座又天暦元年三月九日東駕
幸朱雀院其殿裝束母屋ノ放出ノ南邊對
鋪両主御座（各疊上ニ敷二枚加茵）太上皇ハ東向今上ハ

西向又天暦元年三月十六日太皇太后御
柏殿設法花八講十七日參朱雀院于殿
放出安置佛像ヲ列法具東ノ廂數ニ八僧座ヲ
又康平七年十二月廿七日陽成院七十御
賀正殿ノ西放出ノ南三間ニ立螺鈿倚子
小右記永觀元年正月二日中宮大饗
于儀二条院東對南放出三間儲公卿座
北上對座立臺盤母屋懸簾庇不懸
之四位侍臣座在南廂西上北面

右以此等記加料簡者謂放出者南西母
屋之名也河海曰庇ト名詮也所詮寢殿
母屋南北中央以東ニ戸ノ隔之所謂子之妻
戸也（或障子乃隔）次南方為放出以北為内
方南放出中立帳臺有事之時撤之
次東放出西放ト云ハ正殿為中央向東西
西名有殿謂之東對西對之寢殿与對之
間有透渡殿不及對屋作之時東西ニ攝
云ヘ座子午ニ中門ヲ作リヽケタルヲハ對代ト

云也東西對ノ代也故東對母屋ヲハ東放
出ト云西可准之
物語若菜巻云南のおとゝの西のはな
ちいてにおましよそふひやうふかへしろ
よりはしめ此ひさしは清きさまに
みなしつらひて西乃かたちおほ
はちやうしたてわたし此一二此ついたて
立けて世間のつねのやうにて
みなしん殿のしつらひおほとまいりのきさ
ひそかんよりしてそくはりたゆうて
まは大将ハみ六条院乃事之まなりて
も放出ハ南殿乃母屋としてあきらかな
おしのこらすあらはしにいはゆる西對乃放出と
いふ之梅かえの巻の東北中の放出に
東の對乃母屋之中としいふは母屋と東西
北廂とのあいたに障子ふすまなとたてられし
に性とてもさら祇とも中此放出といふ之
也云此等の会を拾ふ所ハ六条院乃東對

此説ハ源氏表にも此時霞夜よりかれ
ありしてあそび給しみえたり
されハ西對乃説おもてあそび紫上
のおそろふ所とハ各別てみゆる事まい
まし西のとのたち出にハ西對乃説おもて
られたとりあそびたまふにや六条
流たりし八對屋二あつしみえたり 弁
此家よくありし千用て千種六条院の東
對の中にそあそび出とかくしおもし方

河加減此あつかひて 抄
此家よくありし千種ハ西方よりハ小霞夜
ある母屋此中とありして此帳を
川ら也く母屋此中とハいて私れむき
とりおろしそうりハ之暗の方へ 孟
小霞夜として本此所夜と志にうそちと
和れしうくとしらて
花ニアリ

八条の式部卿此作り給ひしと

秘 梅花しみつ

河 本康親王 一品式部卿八条宮 延喜元年薨

仁明天皇第七皇子母従四位下紀種子名

虎女高名薫物也

黒方

沈 四両 丁子 二両 甲香 一両 薫 二両

欝金 二両

又侍従

沈 四両 丁子 二両 甲 一両 麝香 二両

薫陸 二分 甘松 二分

侍従二方故八条宮方と

秘

八条式部卿本康親王ハ仁明天皇第五

子母ハ従四位上滋野縄子参議貞主女

也源氏君のあはせたまひしと此

わさと伝へ給ひし方を以て是を兼

和せ給ひしめの方これハ人の

あまたを組みあはせられ給ひしれ

ことも後しにちとはその人は此宮坊に
よりて加減をしりあつよりて丸
事にかゝりはあつめて八宗或は文は
紫式の文或は手よまへて言又有経方
は不倫男と兼ね此門の流いましめ方よ
のせられは紫上の西徳よまへきされに
よりて源氏君はあはせ給へといふらひ
とのみしていひてら此見えにつく人語り
はせられし

私云河花宴抄に本康親王母相違せり
可勘之
いと見あはせ　河挑
ひし給へは　河秘
思ひのふかきあまりて
(秘) 源も紫上も同方と調合あはせされ勝
方とまた川へさしいり
人の陀かやまれき
(秘) 第の地にて紫上と人源の序子はとく遊

事々

おほ人はさらぬ人あまさかりし

薫物と秘し来也

かうこ此物くゝこ　弄この字あてゝむ　一合点

秘　かうご御厨子乃おき物々

河　香壺筥

む　或抄云東厨子乃上のかしらは香壺筥二

合下膳は薫物筥二合ゝ置此筥四合

ハ筥同様にて四角なる筥之但納物々

一尺香壺ハ銀にて裏壺ハ大なるを

なる絹を入筥二合はあり薫物を納

料々此薫物ハ梅花荷葉侍従黒方

納但此壺の中に雲母壺なるへし錦打

立あり此上よ白針指乃生絹の衣

裹指しまいらせあり其入惟菓筥（イレカメヒラ）

二合打立同なるゝ一合はさるゝのへとも分

香壺三ノ乙此さまに錦のてけいあり一合

小さうなるにはいたらぬをあり常此紙差此

奥の棚ハ鶴乃もちひら菓子をく
とゝそへられたるいろいろのあり
生物をもるハ菓子納さる菩と焼物に
添へ西東おして並へし此外にと
への帷同しく西厨子の上乃勝り違
紙菩二合打立あり棚ハ此違紙あり
二合ずつ切角の菩へ下勝へ櫛笥二合
丸角也浅櫛入懸子よ硯あり打立
あり

今案母屋綱度東西厨子よ菩八合あり
すの中二合ハ青塗乃菩ヘ東乃厨子の
うへよし一合よ蒔塗四つ入て梅花
木積（タチク）蕙物雲母塗その中にありと
いうきらへハ良盤よ用へ一度の人にと
くんなかるへし二条太閤ニ資家母屋の
厨子の菩ハ沼中ニ云菜の菩ハ紅雪紫
雪かうちしんらりしと加へと云ひ
これハ添かくにくそ入物はらはとするゝめ

てつゐとハ永久の御調度然ハ思ふに楷よ
てこそ此葉此書にハ志らいまだ此筆の
やまとの事もかきつくしたる紅葉にも人
やまん九葉うつしなをてハ人いさうまふや
とおもひし人ハ紅葉紫雲ハ中堂より
御かへして加持して給はる例なども
ぬしやらん永代の最こ此をこそりハ
ここ御雅の一もとよりも広きつ父をとし
屋の上よとりんまゐらせよ人まゐらし此

たここまいさ海く此風流なまで此御
見つれさらめしけうき日記りハ
見よし永久のまさや此ぬハて
ハいそうきねのくしろき馬の尾
のるまうけさうくしてひそみとし
かゝりして人女御まいりまハくしう
二枝御とりかさねて入くやうんせ
兼人太くさハまやひきし此ゆかし
いまの世まハありさうる此ゆかてくあり

ふきんしの入道しそられて人
きうらくされてうとうやうくいさ
きれんなねやうん東山の入たくより
わくまかくれかいへしもやまて人
しとあれ候

法かれとうと
かうらみとの中の法かあるへし

火とり　志木相よあり
此法法しのてうとも女御入内の
用意也し給へ法の中へ
取りのみと何らし給へかん
秘　まつりのもくれうんとうりてまんとも
きよしろの十日夜もうしありて
叢物とたつろ見給んようへ宮尼日如
秘　叢の文く　葬
古今宮
和りくあいかうへし

これはいつき　秘　法嚢きぬすく舞

むかしよりいひつたへたる

秘　源氏宮をのこして

それ君の御事

法華經法合しるして

お安浣より　秘　樣なり　矣

ちりもさらぬ梅はえてけり

関数遊（ソリスツ）や　あそ遊ぶ　遍（アラス）

は　高光見此云ひえの山にまみ給ひけるに

人のこころめでて給へまゐりけるに

すくし梅のえだをりてちりかひて

御前枝に法せてけりしける

春きてちりなさにける梅の花は

うつ香のりて枝にかすまる

家にさしめそこともと

紗　源氏の心を治へる事也

いつかたの法せしなれるあそとまつれる

當世人の先生かれ君の作にたん

かくしるして　秘　傳へ
いにしへよりしきたりきたりてつきなるよし説
(秘) 茎物調合のさまをとりわけ弁
ものゝかにいふべき
様式々によりつきそへてやく調合しいて
おくへし
ちんの香をまりのつきふて付そへて
朝かほよりまつせ作ふるわけなき
器(ウツハ)二ミ二種入へし

かくこん西まりハ五えたの枝白きには
梅とえりておもしく川ともひらいと
の右衛も本しひろくりたまあひしとて
しおへなり
(同) 又よりはじめて草木の枝にかく付
物を添ことをのよ残くろるらへし
花の緋櫻楊梨とは枝につけ白櫻楊
の梨とは白梅の枝に付まかせる梅と
えりてとは白しものやりまかにて梅

花と賦或ハ同文の字ニて結ひ進也
く或説云麝香酸と前ノ惹池亥
粽と見てより思方とハ緋瑠璃此器ニ
入て枝ニ付梅花とハ白瑠璃此器に
入て梅の花に付られたりとぞ
一説云梅乃花ありけれハ造花に
付たりとて紅白乃花此中にハ白梅に
撰て付られたと

花
西宮抄 菊花宴賜膳具 心葉藤花開

紙云 今案心葉乃書し様は枝此や
うにくみてえりたるもの
花此中ニうちたる枝のやうにつくりて名
ならぬハしたる之

秋
花前ハ宰相中将とられぬ句ひニ
落とへてより縁ハ花文に角なりあり
枝に付たるも似かよひたる之 奥同
えんたるものゝ沙汰なり

槿花女流

岩ねまくの調之
しるの色ハちりかし枝よこまりね也
うつん袖りあさく志まゐや
此合を頼さき物ハ自ひと子まれなし
うつしまつさ袖りみの人しと
種時代早下し頼へ乃之こく色ハ
あさそ枝り頼遣かし此也之
ちさとかし枝よハ南女流あて時色さ
海と早下してよ頼へつ海ねよハ

頼しねとゝ出也

或

此頼よ南よ前遣わり枝り付る
とあまてちりをさいうとうの枝か
如まれと海うましきれしとを頼さの
此引しあ人身此袖よハあさくハ志
山まし〳〵之　川ち　まるてちり遣
うけり梅乃色まとうりりそ枝よ
頼まつ
かのゝ木りさ代此頼しつまそ

鶯なれは御ゆるしつきて詠し
給ふ之
宰相中将　夕霧之
こうはいうすいろのかさねそへて
は　紅梅重　香細長
む　こうはいのうらの細長之河海
りし香細長とありあやまれる也
裳未は裳うらきぬ又うきぬ也
秋　花鳥の使へし
寿　女乃ゆりそく　裳うらきぬ之
ゆふりもとの裏はうらみて
む　紅梅うらの花桜とさきぬ又は紙
こいいうとり
奥　紅梅かさねたる之し[illegible]の紅梅よ
ゆかしとり
あうらのこゝろひやうゆく
鶯ならの御やまとゆうしなくて
のまふ詞之

おほよそかきなん
(秘) 源乃詞よりは枝なりしつきそとき事也
くまくしうわかれしうえて
(注) 曲 日本紀 漫然 阿同
(む) かくしこれおのやりかけいふ也
はちきゝのはゆてり
(む) 源氏乃筆はは井ては安流への心也
本紙のきて 嵐文にみせられ
いろく

(ヤ源) それのえりいとく心ほとほとこれ人乃
ともかく事とは清めぬ也
(注古) 梅花うつろふいりあひくしく人れ
ともかく香りそしるゐる
梅をは浪のくかあせりへとそ
先は人やらん給へん
(秘) 人乃ともめん事くは清めとくとさ
き物の句はは之津し給ひかくまそ
ありそめにさぬ人をゆかしみすてさ

安　或

白い世へはみえうきて
ちと風流とつくませつて
はなりし人乃とうめんとれおおはい
あわともきうし仏あまた人比とうとも
とれは見給へて出西田さ君うされ
ゑまりしけまれはり見んつのうと下
仏はりし、と仏さし出うとも

奥　松

とやありつるん
きおときまかくし給しまよそて
定此世しうはかしにかやうに
前後よみてありけるきれとや
給く
松云又うく此ちくうきて定まる人を
給へうされは又のうりしにやうにて
こそありつるともの花とたれ
南ありつまれとさつくしまり

秘
源内侍のすけくさき地合とて言人
中将にてくしくき給ひれと明石
此姫君ハ源の一子ながらわれハなし
御かたも
みゝたかきめ給人のうへ
河
源氏女子なきゆへ
弄
明石中宮のみ
源此ひとりむすめなれハ
いと見かくされし

河
醜　素寒秋　桃悪（イトミニクシ）偉なり
外人未見とて可矣　白氏文集
秘
源此早下の詞之は明石姫君なり
只うくされ此人いとうつくしくそ
勝かりのなり　秋好中宮なり
奥
秋好こ裏さの勝かりせ
中宮まつりさせ
かきせんとも
きうしきかしこまりてきさえか人ともゝ河
りしき所
秘
秋好事也

秋好中宮の御事と等しく許り
中宮之
よの常にてみん勝ゝ思てまゐらんとし
きこえて
秋好中宮心よしとしさ不好かりお
はる人おほかるにもてなしとおもほす
そ御ゆかりも一つゝ風さこあるよし
をきこえかゝりゆ給ふへく
あへ物造りかれなん

乙
おやうり御安宮女御とかに中宮
まそおりはへしおやうりゆかしこそ
よしく

秘
宮の御絨におやうり給へきさせ

寺
やそ中宮ありしと云給
秋好こいひ人おほ御よりておやこ
ゆるいふ

河
ことありなふ
截斷　日本紀

これ津ゝそに　無心なり游ノ称之

こゝ久これの志なりに

（何）蓋世ハ志なりま句ひまかり也とて　此或

ハ水鳥につゝて或ハ花木下比あまらん

む此称之

これしまか世絡へこれしありつ見えん

（何）君彩てしられありつ見世ん梅むかを

（秘）香紙も志る人うし泊

源の詞は蓋物の積負とかせ絡へも

志る人りもあつとやとひまし

（秘）無名文此詞

名紙も有くて志ぬくて志るて波

かえんとんの何りうまり

（何）さらの斉の也　畢下

いひ志ゆまるひとものをみとこれから

ひかくさみとかいきてかのにうぼまさ

治しく

（翠）初の流さ草一くさみとらとぼ若悪

の種数をわすへきも夜の方は只一種
人々の方一種と見てこそ
秘
こゝ中まてなり一種のこのみと云れは
おくていふとてふとれは卿なりあくを
迷とも見え称へ
松葉は西林の義卿おほつかなしや
ともあくきさてくろしむかし西声
口家此志は人へともあやしきは
早下し給ふへ薫物とくさて

志つ給ひてはひ志つになとくれさら
匂ひものの中なり沈はなく
見ゆる丁子かられさうなと香なと一く
さ旅のいろかれとも云ともとさきさ
給ふいふて合せたる物の一種せては
あし合せたる物の中此香具一色
はかのかをみと云れとこそしるなまへ
と知るへし志つかはこのみと云れは
一くさなとかいはるれはとかとしもへし

おもふれかわしとすまてよあハん作よ
くさ也へりあれ抄のしく志らう
とみ由

また池二つきハ　源の調合の二様く
右邊乃流れみえし水れかゝりいふて
あしらきとのゝ下より

抄
義和御抄とみへたり　并

何
御溝水
近来東庭流任覺流　昔者立石風流
ほゝ之流水一脉且古立石未有羅砌
也　此能流御抄
義和御時右邊此流の急池よりあり
後代ねしてまれとまへくとく
埋薫物日数事
長寧公主三日　桃家七日　極要方盛白
次免中地ヲ掘事一二尺以上用水急池得

朔湯埋く
云忠綱臣方云黒方侍従春秋は五日夏
三日冬ハ七日埋樹下く致忠綱臣云合香く
後物にのても木の下のものゝ中にあるこ
下に埋し知章朝臣云埋五葉松下春
秋七日夏五日冬十日
む
或説云安流より余まる瑠璃にいれつゝ
二あるの中に仏ハ侍瑠璃に入五葉ともに
枝白りハ梅をそへてとゝそへ葉あと

うつむ日なりとてつゝめるは梅花は梅
也りと菊むハこゝの下にいれ山城
さほとせりつま黒方といふ字一あて
かろきすゝとあらせらくされハ侍
いふさゝのあれハさゝくとゝろきも
とせりかの松ハ四季よかしかて万木
也もあれしなられから葉ゆよりくと
まろうして貞松ハ葉也えさきなり
あうゆ徐といふとりちて些ふなりも

古人乃忌方と感しつゝしりけるかひ
あらそひ給ひける時よくるの
まとひありえけり封せられたといふ
大きさハ墓物なりよしあるまかれた
こそ松ありハこ人ら述られ
松云右近陳ハ西乃方之此六条院也
西の王ゝ文の下ゟりいよる見へさえち
かうとありそひよゝへられらへし
これらつ乃宰相のこ

秘
惟光条儀ありし伊予乃事ときゝし
めそえてこうり　異

何
任条儀有数道書内歴七ケ国受領拾
之勘文父者拜条儀之惟光前播
津守也

秘
若紫乃うう　しむ女子童めてゐたる者之
いと冷しきそんさ
若乃石文乃詞迷返ある判者よあそ
見しりと思し乃称く

折形しこしそいいつても

松 みすもれ同前うるへきと各別り

みしるといひてしたうちるそ

かさあせ治へかたり

歩 うきあせと声ともしらう

いつまもひ山中に

甲乙もくすなき

松 新流乃治らるわりさいへと

源も芸上も君旨とあせ治へれと

ゆまいいつまよりも去川やまちなきれ

ありてもまれあるも君旨此寺りハ

みやうにいるへきうりとて其物象り

いすかまて治め

一 待治ハ折ら乃御ハ

松 待治とあせ治へとあれとも中よ

て源のいちくれうるも　其

一 まとのうへ此御ハこへき　芸とも

松 梅花ねと加へて三種之其乃かくろうに

よせて梅花とこそいはれけるとなむ　奥
御いにしへは薫物のことつくさむと思し
ふかく秘奏に語るとしも書わく御ともなり
河梅花方
沈香八両二分　古唐一分二朱　甲香一両三分
朴松一分　白檀三分二朱　丁子二両二分
麝香二分二朱
以上小十五両三分
こゝまでは君方伝授のわけに梅花と

加へて其ならへんしらひとこれそへて
わろくいて出侍りし寛教僧都説ま
ハ丁子加増すへしとみえたり根の
香ともかされたるれ
よそへんしらひ
花ハにほひはうちやうにもやうかうの
梅花すれハ
これ法の風にし
さいのこ人の薫物ハ八条式部卿宮の御法
君方の家に梅花とあはせ給へりつるの

二代目ハ不得男といふハ先よ代の名跡
つぎそ本格ある人けむとし　梅花ハ此く
えらるゝ人まだ老し給ふ　皆すれハ
二代目ひとてしらそて　名人の家ハ梅花
と称されけるとし判し給ふへ
寛数　俗数の流よ用せて書すれし
丁子と称されけるやそやさんし
らひとそへ給ふしみたり
夏代流さハ　花散里へ

ゐくはいとみ給中よりもへくはもちいて
もやしきりそ人ぞひくえ給つ流心
みそ

ほ

此詞妖艶絶之波影荷領

荷葉方

甘松一分　沈七両三分　甲二両三分

白檀二朱　熟欝金二分　代麝

藿香四朱一分　四朱

丁子二両二分　或安息香一分一銖二両三分

以上十三夜之会

天慶六年二月廿一日 甲午 江忠明ら所獻之

かゑりを一くさ

夜此ほとゝきれハ荷葉とあはせ給ふ

そのよせありふしより

冬のほとゝ　明石之

とらくよりわか身ひさしきよりわかまされ

むしもあいかりしと

合香ハ四季にかよふ方あるへし

春ハ梅花方　此之春のはなのきれ

うらしみとうの此ほの風ふりく

のんよ文りもれはほこゆ包ひあり

とあり

夏ハ荷葉方　花散里上　夜此方合之

秋ハ菊花方　又侍従

冬ハ落葉方　又黒方

寛数大傳記云春夏丁子夜秋右

沉冬着草清季三朱絆て加え

秘

合香古方

梅花荷葉菊花落葉なとゝいふハみなひ
ほんにても合せ候へきとて秘抄
あるよし
これハ明応上ハ名のみなれハ落葉も
合せ候へき事にや
凡落葉ハおちはの名にあれてたきやうか
落葉ハおもしきものゝやうにきこえて梅も
荷葉なとは句ひ木の香にあれんとに

かしておほかたかはるへし
これ元かりの人のかりはとられさらハ

薫衣香

さらの朱雀流のうつさせ候て一さんまゝ
の翻は人のことりまてハほかのまゝ匙
百ぶ（ヒヤクブ）のかうりあしさえて

秘

さらの朱雀流旧記みえハ宗多其れ
いとそ此物候てハ薫年此みなとも
なかりしえてより

は
いひえそらハ今此菩衣者百歩ハ方を
とをかしいて為うしまへらくとみえたり
百歩ハ統遠菩といふ事をまて禄云
奥
又云一方之百歩者云忠纳言義年此人
光孝御孫
秘
いひえそとハ方此字いれんとおもはし
とおもひてとなりたえて
む
此河乃あまた此菩あり河海より
いひえそとハ今の菩衣者百歩者

をもしいへしいて為うしまへらくといひけり志つ
らは明石乃の御返事ハ菩衣百歩此二
とより今て能しくうつしおせり
はしやうまハいつことおもひ侍り一両ハ
方朱雀院ハ義年此御門乃御時
又云忠纳言もろの代よ侍りて今者
奉逢しらくて方よ朱雀院此菩衣
者といふ剣云忠纳言の書れる方と
同し事也百歩此方といふハあらたにて者

氣比まさりて百歩といふ也
一方ふ定へりける也一本朱雀院
の薫衣香と云式部卿比百歩香
と二種を伝へのひあはせ給へといふ
へし百歩香ハ四条大納言の家より
出るよし見えたれとも承和百歩香とそ
法を伝へ侍ハ薫ありあはすれハ式部
卿の此香をさすにもとかくつきたりあ
らんとおもひそとにいふ詞ハ梅花香

薫衣香といへれとも志りてあつかへしかり
とみ春ふ此比とハ此二の方ともあはして
あはせ給つるとおもひそへていへる也あ
朱雀院ハ承和御門御事也西宮抄除
時郁云然朱雀院初ハ太内し時ハ案
金鏡概柳之此然朱雀院ハ宇多
御門乃御事也承和御門ハ世朱雀と
申よつてさてハ宇多天皇をハ前の字をく
はへて申侍り此物語ハ又朱雀院とかし

内々にて秉平此以門とあ朱雀院
ともに此時より云忠卿后薫物方
あまたありし給之

千金翼方云　薫衣香
薫陸香八両　藿香　覧採各三両
甲香二両　麝香五両
青桂皮五両　料理畢し
薫衣香方
沈二両　甲一両二分　青木香二分　丁子一両

白一分二朱　麝　以上大
凡香附子代以雞舌香若華撥丈納
香代青木香麝香代　白檀
件方故式部卿親王上
又方此方一名體身香
丁子　藿香　零陵　青木　甘松三両
白芷　當帰　桂心　檳榔子　各一両
麝香一分
右十物細擣絹以篩為粉以蜜和擣一

千拵然後出之丸如棗（ナツメノ）核口含咽汁
盡一丸三日別含十二丸當日自身覺
口香五日自覺體香十日衣被亦香
廿日逆風行他人聞香廿五日洗手面
水落地香一月已後抱兒亦香唯忌
蒜及五辛等耳但令香於潔而已益
亦治万病一方有香附子一兩

兼和百歩香方

甲香 小八分 藿合 小一斤 白唐 一斤

白檀 小八分 零陵香 小八分
藿香 小四分 木杏花 小四分
乳頭香 小六分 白膠 小二分二分
麝香 小四分 鬱金 小二分一分

右十一種搗篩和之於瓷器中密埋
絕三七日取燒百歩之外聞香此方
出自四条大納言家大江千古於上卿

沉 小四分二分 薫 小一分 檀 小一分 丁 小二分
甲 小一分 广 小一分四朱

又

沉 中四分 丁 小二分 甲 小一分 未 小一分二朱

蓉 小一分二朱 已上 朱雀院御方之

薫衣香 一名黒方

沉 大四分 丁 大二分 甲 大一分二分

薫 大一分 广 大二分

百和香 字侍従

沉 四分 丁 二分 甲 一分 四大

全 一分 朱 一分已上小

已上仁和元年二月四日抄之 増換

さかの朱雀院

古今集に朱雀院とあるは亭子院

くいはさかの朱雀院と寛平法皇

うつされ給ふ所は此物語は朱雀院よ

つまされしとふんふ義平此代香を志

めかすかし 古方ならの[illegible]へかり

云忠綱は 号藤野井弁右大弁従四下 天暦二年十月十八日卒六十歳 光孝天皇御孫大蔵卿国紀[illegible]

高名薫物合上手之人延喜天暦間
太大弁公忠朝臣藤人所出合人大和
常生相並奉合香之後
栗
花朱雀院薫衣香乃法門とかへし
よのつね縁まいらす此みえはあれ
朱雀院とかや
私
私云此義や花よし
よにしをあまめりしさ
薫衣香百歩香なとしかるへき物よ揃ひなりも

又まうれいるとも
いつまでとも心やくなからん
何不安徳（ムトクナラ）
常芳いつまでとも一とせをまで
なとかあらぬものかはれす何
まさとも無下にかくしてあたちけるを
仙さまさあはれなんざみかり
秘
俗の何いつまでとも是れの花へるを
用もしいてあまたれ

河
薫物合のすかたし河は正月晦日と
みえたり今此月部は二月の初とけは
薫物とし秘説也
ひ
上の初よりことし此十日とあり河海に
二月朔日と云ふ本遠かり
かれかの月のも色もくさきと也於こゝり此
風すこし雨そそきて紅梅のさかりしきに
色の夜叶え乃袢京氣に染めて匂
花乃あたり

秘 （了ン）
春乃あたりは
前人亦此ことにも
奥 一篇さゝに志のせ男の木かきりしと
河
花人亦夜とまあり　秘 六条院此夜
六条院薪人所く
上也
あそひの御わかれひて
秘
御嚢との御遊をへしつ也　弄閑
はしりの御はしへみちて

は

こゝの帝かくれ給ふを推はかる
ことはりんてさは給の西若く笛よ
さゝうんては次の初ましはうを
わきまへて侍りのこと和琴とあり
おゝしき笛の孫
こと私の声とかけて名のるもの欤
すゝと画し
うち北方のは中将弁少将
柏木　紅梅大臣之

きさんつゝみて　河見象
見ゑ給ふ今日まれしくまいりさうと
せうすの文若を渡して主人一見
ますゝの前舎のうへ也けはかり
秘
見ゑとて和紀の奏とろ也の勅への
奥
叢この礼く　松は義あり也義は国
文乃おもんよし
蛍 紀伊 源 箏 柳木 和琴 夕霧 笛
紅梅 柏子 梅かえ候らふ

おりにあひたてまつりし雲を名とせられけり
河 是ハ鸞鳳調也　一声鳳管秋驚秦嶺
之雲　不可用之
梅かえいつしらすほと
河 梅か枝　催馬楽名
秘 此巻名　これによる也
私勘入 云 梅かえにきゐる鶯春かけて
これ二段 春かけてなけともいまた
雪ハふりつゝ三段あはれそこよしや雪ハ

ふりつゝ
弁 これによりて巻の名とし給ふなとゝ
初に付合を詞によせ入又句ありて号
とて此同義也
私 云 巻名清くつゝ乎 桐壺巻に載
毛詩名篇例五之
もろんめてたかきこと此時ゟ梅かえうたひ
河 清末の巻にあり　并 秘
弁 内か物語をいひしらる筆者也

無所此人郢曲をしれるすきし人と
みえたり紅梅大臣
あるはたとへとさしいふ人
助音事也
すくひものゝ忠やいへるあくひ人ならむ
めつらものあそひに
鶯此郢曲なりさしなる
むハ菜物也
秘
催馬楽の梅かえにきゐるうくひすよ歳
ふうく山しむはうたひ物也
らくと志めほうのゆくく

一

千世も座あへしと
何
いけまてのおもかけみのあくらかんとも
しちもとハ千世も座あへし
秘
たる郷ちとそりの命を続の糸にて
よりて此何絵あり壽関おも紙かれ

すにこゝやいとゝあくかれんとき
此門前西かし又此方山のあ
津のくにさそへあそつきに驚れ都さへ
そひされいつもあくかれんかもに
むしちくもはつにかの世も急あまし
とひひをさう同れ
源
まつしりともけかりにこれ来いくれしさく
やとの浅き庭もあられん
松
源の舟へ此あつりくと面しつと路

へとも　同心あつめく
少中将なまへて
源の宣とも柏木へさみすゝなへし
少中将
うくもかも被くて乃枝もあひくまて松吹
とゝ浅せとよの笛竹
河秋
萩の名いあそみてとも驚れ松なれ
枝をりしまあ あや松そも
む
少中将の峯ね中将まさせい笛竹と
よかつ　松同

宰相中将
山おりて風はよくあたるの末より
あくあまて吹やよるへき
[松] 吹と汲せといふとはけたり
[奥] 笛なれは萬梅曲と云てよあ乳吹
といふ詞よりてよめり　因
物乃音よおとろく河つら山之
[花] 風よふきも山してちるはなもふき
やよるへきとよめり
宰相中将よう擬花かへすとよめり

さて下乃詞よ情あくよめり

あさけおくと
[松] くて乃はなのあなさけ色にいなへ
[少] 吹と世はあらてこれとなさききなしも
[弁少将] 霞よ月と花と山風さて見えれく花鳥
しかしなひるまし
[河] 或慎鳥花軒くとかしあなとあるく
歳乳なれのかしあふれひしくなされ

む

た鳥も都の数よろ出れ
鳥れかしあらいつれなしくは
めてなく出之弁かね梅のえをうつ
りつきて經ての鳥もかこちいた
ましとかありいまさ秋あり紀り
よりて初よりいすねよりしく

笑

鳥の羽出ま本たく加すまいれ
秋のあくふし月のたえんて鳥も
なくさとも庭鳥まいかれ

松

夜のあはれは鳥の出すけよろくあさ
まし霞にあくは秋の明さうとて
鳥もし出まさにかこちふへきとも

松

此梅の春中もかされて鳥もかこち
物思しとやつまさの春さは霞れ月
花とへてて夜のあさ夜ともや

雨ともほ明さにありてそて

松
此哥をとらへていへり
見けるに時もありし此時の事をかへし
源の時もりよむしらへ（ゆうと云へ
とくり物をしらぬて
てるまゐらせぬもとき物
奥未燒之
抄
いまこ識しせぬをききもつかへし
筆者云
となへたとえ物をぬ紳よりへりのそこと
あやまりとはいりや はかりかん

む
これえ物ぬハ源のぬ之よせてあるすし
奥
琴のぬハ早下ともせあり紳とは義
保閑一義え可ぬ　もとのぬ之
源のともりの装束此のありて物なく
侍りぬ之
抄
筆者のえ此　此紳をハとめへきさ
とくえあるぬ一流　殺のぬ之早下持之
一義え物のぬハまつるぬ只とをとくり
物のは専哀此のありて行と礼く侍るか

ちらなく
松葉し節の者ハ若菜あつき所の袖に
こかれつゝ源の道まふ世長さらく
風流めきたりしいりやとらめんとよあら
ふむおりしら
いとくりしらやしまといふる
抄 くりしらも
いろやとらめんとい所とらといひてし 異
妹本をあつ所に伝寄香おりとうと

源のもとひまふ詞く
む 若しらく
付車の所かしにとひて
抄 車の牛をかくるとをひつきて
付りしあるく
文 車やとうに車をとくるかとく又車よ
牛をとくるの二之 椿名流
車よ牛をかくる
松に車よ牛をとくる也へし

光源
めつらしとふる里人もまちそみん花の
錦をきてかへる君　秘
花の下にすかれはなを此錦をみへし定も
やうかんとのへりを見くさあて侍へ
みえ此本衣をしらせ給りとのへり
よる源は此人をなかいといましき
と此文は源より一順とへすれとみそさ中
すれはうくのまなこ也　古来此二説あり
後日作云此方有りさる方之花宴巻よ

二条院見宴
義田
小方八

花宴巻と
定り此説は
小方ト云へ
十人なし

二条乃花ゝ残前此花しまよへて乃宴
なりしとよろは干此奏りさるへされはく
源氏は此ふきへしとせめあそく岩ありは
文は一夜の花の宴もみ給へされは此一
夜の花の宴を小方は務之しき極まえ
まよへし只今内裏をなくなへ錦をき其
て内にやうにやつしさ事なり
小方はなる裏をつきもいとえ候しさう
とゝもひ裏へ後まよすへきゝく

奥

花の下此君これは花の歸と云又云源
氏と文と人とはこれかれは早下もなき
こゝろの哀なる人にし又云花はし
き源氏のまつせられての所々に若
菜の白やとさ此事かれは光あるく
ものなや我之はとろかめは光きりしを
てりしけや

或

此流におれ見よいはやとうめんとある
とりやさへあるまし此くれの歸をさそ

人のをとめつはましこして古人は
ねかられめしあるりとて又乃哉一私も
まれたくそ古くは此序あるを侍給
ゆゑんよかく所句の成志めての人を給へは
ともその歸をさそて人の所やうにたるへしと
室家もあかしめすつきしよりみなもて
諸抄にし此後ありし西向にして
れ業しめつしとは今来あるし絵
かくのつえて此つて其の跡は深く送

りけへ御物すれともさ殿下よりうさて
みりのことまてはさらといひさへしきと云
時定まで小者ハなしされとも家代ハも
やとりめんとおそりされしされゆて
もとさして有ける人も侍るんとも
いふ家ちる之しえかさことハ一称なよ
れしもまれよりむなくそ古へ人なれ
思ひけんとまや松殿よりも室家り
みやなくとそうちあとも 河奥同く トアリ

荒ハまことより出て殿御ありし給けす
為めしたましにて武蔵へくや又範ゐ
殿と深内よりも殿へ御文奉るなん
あてもたえへりけす 宮内御弁たしえ
あるね袖しよみ殿へりとくましんや
喜こさ御中なる遣ハ早下されうきて
うく此よへるも殿へし殿下よりかれは
殿とおもひえさて古へとみいふり給ひとさて
古へ帰る 古事あてなるへし

いとめでたかりける　安文九拝之

花
かしこ侍らんこそなん之

つきての春うちてりと

此中ね弁かね以下ゑ之へし

かくてあれ乃かとこに

秘
秋ね此神乃殿之　弁図

いぬ乃時　三天地合此ある日二月十

一日ゑゑ之へし

是此ありしますあれ乃ゑあらそ

秘 中宮之奥

む
西対乃ゑあらそ之此ね中之此ま

しますはべ之

此くしあま此内侍　秘 髪上の事之

内
着裳乃内侍とあまり内侍凡人さし

とう仙之内侍つき従ひとはべらる之

奥
一勅之内侍うる人乃まへ従ひとはべらる之

うへしこれはいてよ中宮よはさいせんあり
先上秋好と対面く
河図のひいてとめてこうしのこたへハ見人出まて
まかまほ
秘 中宮明石姫君とりかへて見まゐらせ
おかしきおしろくと出来まかせて
秘 源氏中宮へ申給詞 弁
たのみを頼みまゐらせて
明石姫君ハ今日妻とさしあてまゐる

こましとよもあか 鳥鶴一揃の絵 絵ある和漢
これなるひかりよりしていへもさくれ雑あり
もえさるらむしきなれもい筆あれはまた捨す
在人の筆.
花
かはれるをハまほりハ鶴れてすこしこれあれ
此物語ハ源氏とさしそもとかさねあれ
しをと絵書さくハうすとももえさるまてう
さきをしてく家隆の歌
かはきの色もやりこ夕霞の

雲井に向きこそ月のきらし

此哥ハ古く九條家を向き御みなしてられ給り

不論ヵよりして用ひぬ事にて三筆と豊

草井以ひ又出筆の其名をも以らし

秘

論をらんてこそかきて記し以不顔優に

つきそて云にめくし

弁

吉ろハ静かにてハ論とみなれ寛よ

まさまてハ其へして打こそのやさしこれ

よりてかけるなへし遠云の流れや

筆

只論や流てみきよ兮す

いとかくしぬ人を

筆

浮船の古君に似たるをとめより

ひしこさ人みなそくらまへ海て

秘

あかりし此事もこまつるをとて

文こなれゆきありさ海

秘

浮船乃さ海ゑ　筆

弁

の手紙かりし人の招めさこ給ゑ　筆

かよをときるくなのみさ

浮世のさ海に葦のうきふしにてこそみ
ゆらん

（葦）宇治もしのかうき涙ハくちおしきあやまち
うたにこそ候さりけれ

（松）捨ゆりもくちすまじきに

（葦）葦乃さうえとしもあらでのしるてなき
ものうきあやなむハ濡の字のねもおきに

いさらんかひてん

葦の網引まを待らんせりきに

そしまゆしうにハあやうさ宇治橋とくち
とある絶とすなはさ此よきや

（松）うたしもくゆも深まありハあやりしきや

（葦）葦の生まよ寝してもみさらに

心やさき此さ波かうく

浮舟とまくやさてくろハきんと葦の空

いとりもありとなひ法に

（松）葦の心や

（葦）浮舟のさ海をお月きに

おもしろうさあやしみ海さわまり

弁
浮秋の称ひまはりしを物かて望ヒ
ならぬ之
十三ヶ条
二月の十日のあかつきに内にまいりしを
禁中小侍従作文をとゝのへしと之
義
とりにあひたる物のまへく
流枝のうつし時花にお遊ひけるに
宮侍はこれはとてこそて梅の之なりて
白文
近く待ちの事たほしいつる

秘
義
草子記之
蓮の好文にすゝみ給へる事とて
この文の侍らめのまへに
義
白文の禁中にての直廊へ
あるんにね物の給ひとて
弁
白文の侍らめのまへりいでまひし之 秘
義
蓮の優撲にあひと宣ふ事之
やミハあやなしとおほ枝のさかひあり海まて
は
春の夜のやミハあやなし梅の花

義

又もてみしをやハかく汲く

川ニ哥日蓋の歌之句ひハ梅よりまさりし之又

蓋の袖の見てぬをしあやかしと云へ侯

おもひありさ流ちりちり面白し

衣かつきにころひをや

以右 さ庭ふるとかうしさこらひをや

筆 ふ茂縁以ん宇治のふし味

川ニ哥日 何をみるてしあかそらしき亦れ おゐ道

秘 川弁 浮舟のすゝを思へ（ふ之）

もしも流をあれて

私 句の心とあまた蓋を入かくみ（云

路ハさ浮かうへ

又ハ袖をふかかりゆかしき色さりし

筆 句之蓋の口すさみを以て此思ひさうへ

とろにハ歌もりねおかり

句の心に蓋の浮舟をとをらみハ云ね

と見へすく

ころしく袖をもれのし云ふやらかと

箋

白氏浮舟を望えりとてやゝはしと云ふ
なに薫しく云いて寄りよき
まひしくもわかれかくりなれしやり
人をられて

同 本人(モトツヒト) 古人(モトツヒト) 万葉

浮舟乃葉をとりちらし我土八分にかか
多しと白氏か深小移さみ見すると河
人とハ葉浅さして云
仕とめて雪のいとゝ多くつれ〳〵なりに文そ
まろうと得りんとて

秘
先来能を浮まして明朝詩をたまふ
とみて多り 平

箋
甥羽之詩を献するなと
おもふにまかりおへぬ
白氏文之
かの君ておもしろきをほし黒かりつま
さぬきうらやみまや

秘
此年の事不審之白文若菜巻に延ありあり

絶句を二三歳の兄より習ひし白楽天ハ
あらし吉さくこれ人なれハねたましく
かなりなせ間之荒外物流のさ海之荘子か六
時代のお遠しこ間人をもお村しても
ふ之喜所之一　弁同し

箋
白のりし後に莫ハ淀生之家の八莫の
年のまし白きよりれり荒荘子の筆遠
莫の年をとりまてさ之世をさ遊りまと
白の所し佛心乃おさぬらね故小逢深に

なしるこ莫ハよろ白ひ之深之
のまのまんかとかくせらし
あて為ほ男のなくのに
莫の事をいふ之
みちの佛せこめてあちねむとなしされ
山根莫の年残巻てらり
ゆえなりとも

秘
政道のうへくかゝし
おはゆをくしきかなと

抄

けしハ先文武あるへしかるへきハ

政道之識の心盛也

かゝる事をしいはれん

抄

白文おほり好しいにしへの道とも

作用しよみしきんとや　弁

箋

白文ハ清浄のすかれうき人の心より

心のからすほとてはとも絶しれ

我あかし不書に先すまて好文半すみ

生の清ん風なる人し

かの人ハ清まもれになといふ事也ほ

まれし

抄

蓋乃衣をしたなとひて清

それ之よといふハみさ清之

私蓋の袖のおもすきまかくへしまく

てよしれなくてもひをすゝ

あくりてはしめしらり

箋

白ハ文字ハ（おもしろき）

東よハとし海りりれうりあの雷

花
去ル雪代ハ約律とゐみもれまいらせて
まつ候之

筆
なまつハかりれくかりとい文字妙之こと
しまれかれ道をまけます

筆
雪也くみせそ訳山名のありさ候之

秘
いりくゝもらしく候へき
内記も或ハ大補も皆儀弐官ともし
き官之
私ハ内記塗目こいてさりのそむとハ此鈔

朝大補をかもしゐやこれ或ハ大補とも
なりさもあらしく候わり
大内記ハ詔書宣命位記なとをつかさとる
或ハ大補ハ献策宥試なとをつかさとる
識之事もらしくさき識之

筆は宣乃塗目よ
或ハ大補こ成らう
へしとあり　花

はさしく ひきあけなと

筆
さしぬきれすそや内記のみをすて
なりしや
おもゐしけりつまて

句よりよりて行しまし平ちうかくし
あさ海しらあられとも花と思へハ
雪をともみさておもしろき浮舟の
こと花と思ふへし
こよひハ浮くもし行てとまりぬへし
浮舟のいふなりそれ絹りしもとは
とまハ雪をともみさて句おもしろき
感しめの気盛へし
たぬしやうにもつましくおもしろかなしん

桜
待臣之義
心さ海こそあまなりぬ
花 あまハ奥之あまなりハ伯あさき
松あみなかりぬハ伯あさきぬへ
ちれ下せしあれくてまつひあへ
ちさくなりハ霜の下をききとせんとなる
とくえの山をひに海さしつけて
束のおちに立ちぬ絹りしも中くなるへし
此暁にふかり猶りしハ名残おしき

中一日（ヒトヒ）よし時人もなかりて参りけり
むかしは家をもちて浮かなるをもてこそ道
その事をも時方に由をつけ侍るなど
されどこそつかりけるかうてうがつ侍るなり
時方をは絵筆のさへられつかりけれは殊更て
ここへ時方のつり真かり書かき給へさて川むかひ
ふまでおもしろきなり
これはいかめしき事なれと
大かたの浮かなるといはで一かたならぬ

かくしるしはべるなり
まことの風雪をひきかけ
ゆめにも飛花落葉なくていへり
大かたはこれらにしるしは
筆　筆をみなつひて人めをつくろふ
ちいされらはにかの移ひて
秘　猶まてし行へき道やいはれまほしきは
札数あるさる浮みかきつなさや　筆
弁　字流をまもるべき道まもるべし

まてと手浪ハ何ともなれ浮ふまてな様
かまくや
浪とつきていさかれことらうなしと定す
浮私れさ浪之　　白れ浪之
あり明の月をみのありてあれなすてもらさ
まされおに・
秘
此細まて、えれハ文作のなひし八二月中
日頃之こてハあ明の時ふあれハ頃とくさ
ふ之　此雪のさ浪衣くうしなみかていひ時の

雪まれさまりさてやさての手れ様よみて
まされとこま間従をくさうくし
こまふ人さ北されのこうし浪とりて
河石
けりともかて咲白すり人さをち花の
さし浪のされの山つきされ頃
葉葉ふハ橋鴻又小鴻との浪よみとあり
此下ハ皇子さるの生の之玉枕みハ河内国とあり
めり　但七㴱稜ノあとこ　大鴻枝小鴻山郷ふ
と伝せり

はまきそろふ堂の硯の本のかまきの事なり

筆
冬ゆきも梅かゝる本の筆の文川の
梅ハみさく花さくの咲さく枝よ雪を
きさと出しともさハのま
比なりにゆめり

桃
うまみのへいそくかわなまて
白の頭心つきみ霜雪みとうつきさや

白
年ぬもかりん抄く比花のこ出のされ
りしちきぬこ綴た

鼻
ちし内のさる也　後出日
堂硯手の文なとてと見語てかん条か
とハゝみのへおむしとハおゝ也

女
桃
女しあしかんをのやに出なて
女の身あハ命の身ハあしきや
私約文おかあ由りさ本みうしきて
ハそしあおれハあしかん道の中
小あれしてとハ冬まり

世俗私
今比大殿のうし由の文ハかかりしとこ度女

ちりのえにてまとめ
抄
此の深秋巻の名なり
秋なりけるはまかりける青之ヵ名也上有之
の穴まて新やさえなんといふなり
よひらふさ海之
ぞりうへかさ海
筆
白氏文之雪白き花のさきしと深秋と
路ありき海之
いはき深てぬきもしれて

抄
白氏いはき深て又人かなともなき之
時方ゝむちられいふとのうし
此家の詞之時まゝ数又因憾ちゝ家之
まさいとねくしさ
ろうえあなゝ家のえてまほうき之
かさんのりに雪むしきえいともさく
りりて海ふ
山里のさ海之詞毫の時方之
かうゝ秋ふなまれ時れとなり之

秘

梓衣之

うちけふさ山さはいとふくし

浮雲の色之

まちかかのさしまは
黄山ノ二乃うきさみをもしふあらり比情露
年山とも乃りし也柳乃枝乃　色葉ハ枝ハ菖をもす
つもかぬ之ちよ連ハ枝の乃まを立て此契五年前
かりの内しきもいふとし

はく……

すらくかとは

皇后の染殿を斗まり宗中書おもちら
ちけすかをてり中比たくしまてハ那
せこ之寄りかりて之むりし皇后の宮みて之
あまさくりの宮とのこりありり

秘
太とかへ人のさらかをいくりそるを　箋
私の種の年浮みの心

まかれりけるかなし

河古
いぬかみのとこの山なるいさや川いさとこ
多くしても名りーすれし

秘

埒なし

うちとけがたき御気色いとくるしく

浮舟の詞

まろゆきをまてきこゆる人に

白氏文集

おりしきさおもあるあふさきるさと

なかりしこきはきれもしらぬ逢坂の（逢）

作者なま人とてもかくまてうちとなる

すみかなとは

白氏文集にありし楽天か詞にしら

けまうまてゆかしくてまて那

せさいまうりて見し白氏文集にて

あまさくの御となりのこうるあり

秘

大とのかみ人のなまとしりかみ（義）

私伊勢の御浮舟の心

まろれりしすなし

河右

いぬらしの前の山ちかきやさしこ

まへしるとり名りしすれ

白氏文集のこと也　菱川寿日

いとめでたし思ふさまことなり

秘　紀伝の心也　箋

時々をおもしろくて

箋　此宿りは時々の投文の因縁守る者

なれば時方をあはれがらせ

又ひきこもりて物がたりしを承認

宿りの時方へおほせありしことを

いくりの聞れ

時方は思ふことかなひて喜んで又喜ぶ

宿とりは宮のおはしますところは必ず

いとをかしうらしきいふおいそれ

秘　時方がかてとへ知る事也

時方がこどもさおぼしてゆくこそ侍るよ　云々

人も多くて心をつくかなひてしまふ

箋　浮世白氏文集のこと也

かの人のもとへのしるしりきみんみ

秘　一日ちあきみちけてしそひ給也

くしかりて移ろひけるに花咲きける道

義
蓋れなし

二の文をいとあはれにて

秘
蓋乃事也

義
蓋れ事を深き心ひきまへとて女二文

を歌もしのりをかへりみせ

かりんてとめ給ひしをこともく

私
見えぬ語の為ハ蓋の深き心人に於切なりきと見えける
ゆふしさやとふり

花
蓋乃哀さうしこさしと乗ぬまなす遊

ともみゆや

秘
葉子花之哀さうしまさ蓋のふかき遊

弄八巻

いまこしうかし深き事なうあしうとのあさし

かみよれ　一

義
時分に白れ給ふや

花
時ふくこと給ふ

秘
時分をは翁りかハとともてなうなと

又ハおもしと見えてたゝかれのまゝ

私さてかりてそれとハうつしし文字

さ面なりと成翁のりにみえうとや

身
時分と存寺ノ主とせうしにて返哥し
光して家に候人せすりとなに候人そよさく
きうしの事也

このゑいよりれおもかりして
花のちる夏時雨也

うつすむらさきえ風の形しまハ
義
浮舟のすみ事也

山ハかゝみをうけるやしに
秘
あけぼのれかてわりかりしろき波人る所也

松月雪の所を四山如玉ともいふ
あられなくとかりする
白乃御物ゐ道のさゝなかといひ也
白
峯の雪汀の氷くもしつてもそれにそまる
何ものかしりそ
峯の雪汀の氷ゐ常巻し分るハ所也
あひす浮舟を思事也のあるかといひ也

こゝろの里に馬ハあれと
花
京我思えりといふ也

何
山城乃こはたの里に馬ハあれと
君を思へハかちよりそ行

義川寺

定済丹
ありみさま汀にこほる雪ふりし末天
みちくりかれるをみき

秘
浮舟の歌

業
汀にこほるハ流れうく沾雪之かれハおち
流ゐるをとりて

札
汀に消る雪ハ波にて消やとえれあるかも

自様にこほりて消ゆすあり此浮舟なり
流れる様ある末天ふり消ゆへしとや
身をたとへていへり

二乃なりそへるとさめなき

花
ありてもそりまうりて中やみ月とあさ
とのうちゆかし給て家乃とさめなき

秘
一うこなりぬと自見しみなや
私自見乃ハうれぬをもて我なりと
しつまりふかく出をとさあるや

けかしくミとかきてまゐらせ候

義　浮文の色

ゆしてそふみかうひわだ

白の薄き色

薄あをく有りし

白の薄様二かりし一重の衣まてほうしろ色

ここちよふこそこころいのとかりね

花　濃打のきぬ色

秘　ここちぬハ葉の裏色　義　紅のきぬ色よし

紅葉かさね

ありひきしらう

義　さきの心かけのてらわかすりさ色

きびらさしそうまゆしをあざやぎいかれしこの襲

をとりしきて

は　ちえしらうハ襲の事さてみな浮色

新　似懐かちひしとききえてうらと　浮菊書てささせし

花　ちひしハらしく襲之裙の字やそれ襲など

日を経てしきしきふりやそてうハ襲の事なし

秘襲之

菖蒲
あざやぐハ鮮なる也衣裳なとのあさやかなる也
ほてりけまいし也
綺羅の裳をとりてかりのにほひ也
ひて白きうへのかの水まつせるよも
むめ又みこれちみまてまつりかへハ
桜
廿一文字なり 花
そのかたりのくミミかつりて
白き清舟をるそてかへさん須まえ又あひとそ
なりてちかの世なりしるゝとつくものをあはせ

あまくあさにせちうつね
白直にのまえ種さく葉にまありとき
さまかふいえねを種さましく味いく
ちりもとも 一
らしみそもなさてしよ絹川のほとりにて
は
うみてきちかてもいくすれなきか
積ふく人のかなきれらすして
義川哥図云葉りりまりこ
東山くめてくくり也

義 又かなかく宇治へ御わたり之
いみしうおほすとも人ハ
匂のしみての後浮舟のよしうおほ
きこえて薫ハ我ものと浮切なかりしとや
らあるそてあらめ
浮舟の事也
やうてこれよりわかち給て
匂ハ薫大将より口ききに宇治へおハせし也
いとなやましう

見もり匂宮の御文のみこそ也
御物ふしきれに二路なりハやすき路なれ
抄 浮舟之御身之人こそけなりけれ
流しそうかなしみて
ましいひし人の事浮舟の心に
あとハ宇治也
弄 乳母の世話 又云若き童女の事なとかいふ
抄 此継母ともいふ事すなハちしりうとなしや
義 此継ハめのとの母也て匂宮の心をさとれ

聖とりし之山伏て何ハ寒通ハぬるく
ゐへし人の妻て
くわこまあるれハ
弁 産乃事いまたしらすや御身まし之
色やともゑみおす
弁 浮舟しまと云哥をく人給ハ惣之
花 白雲乃ひとをえんぬきを
くあやしこゑ聿まきのと
宇治の文ハまくかりつぬき海とゑ

かりそめにまよひし給ひし人さへ海
義 薫の君給ひし人やましとまりし母君乃
ちらくれうしてんと
義 思ひてあつかりし宇治の浮舟をとりて給
さんとの事之
ころもかしこまりしも人に事み
義 浮舟の上之
あかしらうの人の
義 白氏かいきまうしのかたにありてきこえし

又おなし

いましうたりしかて

秘 白氏請いてある人様しかしこと

をやのよにハ雨されぬ地のして

河 さしうちののをやれのよこかゝのこゝり

いせよおあらいしのあいはて

秘 いしのあいハとて乃也 蓬川弄曰

弄 ゆふされといふ也之雨せのとハ亡字歟

なしぬ也

白 おうあやなかに物との雪しのてぬまて見え之

ならは法乃ましき

秘 西乃うちと云事中りて乃なる色し

蓬 前さく ならしとハ袖乃風のきてそ見り

としいしをりとおとハあるぬ

蓬 浮み乃行列之乃

秘 いとう川を四ひまさりの人けまて

白字ありて公ハひく色をまことや 蓬

なしめの地さりねひしき雨たちすらの

それハ　秘基之
世中とさりめしくらし見なれハみや
浮舟乃巻之
ならうさ事ニさし使まて
白文ニあひし事基をハ内物してく
流りし个之
いつしかと思ひまよふ世やみて
浮舟の母君ハ思ふましきおほ世事
来ともりしを之

うつせミし給人
秘
白文之　箋
うれうくの大君さん事
花
かれうくハ中君の傳事之
秘
きとひ麗おかとてりや
あやしかもし夕されのこ路ハかりにふ
手
白氏二条院ニて浮舟にいらさきる給
しけの事之
秘
うれなきか世なりきまてりしぬへて中君御

後二条院まてなかのゑらひ給ふ也
そむにしあれはこの物語これかれは世の
京にも人の上まても沙汰しめやむ事ハ
かく御しこと也
私になる川のかれしおもふに世事はいにしへより
絶て清きまて見る人しかるへしおもふあるへし
清ゆを世上浮舟乃代也
やうしてもあわれさ御乃ひとつくしあらんと
新
業平乃清事しるりかたれ文ハなまあかなり

ありさくなる人色しとそすむ女乃心の
まことみて畢竟なかれ色とこころか
もうかみてきすられまするのて
秘
もうのあれ白乃ゆきと八重乃御しきそ也
その人のみしと御事なすてまりん
秘
業平乃事
かの能よりなにかひあり
業平より之
これの事にとしるくこそ

上 匂宮の御事
扨も此君ハつかさ
中 匂兵部卿 并 薫
上 おさなくよりにかよひて
中 匂宮と清少乃かたやみやまみえまゐらせて
ことに打それり
中 御姻の
殿の御子とにふかよひなして
薫乃中将

このほとの文みとまいりて
上 匂兵部卿 母后明石乃中宮也
うしろやすき御清きこえのかたや
并 薫大将乃御姻と申
殿は清あり御みまかりてのちハ
上 大との薫とおほえていふ也
是この清少とハみかとしかしこき御
匂宮と宮通の事
心よりおもひしけりハ

松 伯陽ともはやしていひゝ世かくるり
のちの文字に八　**義** 蕉の文之
とりひきつる日よりつゝみなかりけり
松 蕉のみの絹　**義**
おろかなる身やいかにせし
董をとるゝに笑まれゆくえをいそぎ
蕉 水まゆふきちの里人いかならんぬかるみ
みゝおれたりけるに
松 宇治のさまわいとらいつ

義 かゝあは此風をとり世をすまわ
白さもきしみて文
義 蕉の身乃としゝさ稀之
まれなるを人ぞめぐみよ上と
松 句への清ふりといひそくし
名はいはさこし掬しとゝろゝ成て
松 あれさしれゝ舟風もなよぢり上心玄之
淨舟 里の名は浅ゐ身のすみれは山城のうらの
わすれそいとし侍らしまゆ

星の名ともなる月のまへハ
黄山ノ月のさハいつもとしかも深かりけるすまし
子(?)様とも名ともなる月の川ありけるやうにされはさるに
陰うしとみえる心の句平常しをされともかゆる下
かりけるや

みなみまみ文のまてうきさとなし感の[illegible]
此度新拾遺撰ありし当式目とあり義
哀乃うきさ返りし恋を
松
男女をとりかはし給ふ義
おもへしる海しる年月ありし

浮舟の句とめの契ハまたはやし年月
と思ひか浮
おもみたしことりまて
薫ハ女のまて夕に人斗みな涙んも
口おしきことしまて
[illegible]浮舟
かきくらし晴せぬ峯のあま雲にうきて
世をふる身をもなさはや
季
雨雲しくも　天雲　峯とも同之
松
雨雲天也　雨降の用也　雲ハ行来[illegible][illegible]

弁
星の名とハ宇治と云辺之人丸の句にや
ことしよりいとしといひし感あり
秘
星乃名とハ宇治といへり萩隈とかけり
あるいハいとしと云之ハ宇治の星の名と云て ことさらハ
みしあらハ又ことのてらさと云人の感の之 義
此歌新拾遺集にハ業平朝臣とあり
文乃ことさ渡ハりしるしと
秘 男女をとりかハし結ひ之義
かりくにしる海しこと筆ハえしと

津舟の包ひとの契ハ末とほしことに筆そ
と思ふか浮き
おろかさしに物哉て
黒みみ見て自に又筆みの心そ
口みしりえ之しにて
自ヘと津舟
かくてしけし晴をね紫のかすかやうらみて
世はみな月をともなかるや
弁 雨雲とハ 西 天雲 空ハ月之こと
秘 雨雲天やし 自流に用し雲ハ外来なるさ

善 捨へき中に我身をもなしつれとこそ

あまの雲ハ天雲之此哥ハ面白よ為也

のゝしり集ともなり消えさせとや

私ら云ハ了て我山なる男をもと云詞さハ

兩雲の事さ了て世をもかゝりしみ身をと

なさりやとりまにて歳しぬもりも文字あ井

へのきにのきこえ為り

ましてやはしきこし為と

河 引手乃袖なさうつにほるしもすれハ

難波の水のわくとなりなん

花 白雲の立ぬる雲井にまよひてハ

いつれかそれも思とゝなん

松 花鳥川音もみハかくなる〈下濁点

此句よハ身をとふさんと云心あまさハ海に

此心みかく叶へり

二句の同之　奔同し

此句もたしとし

善 白の心之海のその心なしりくの廻

ねざめてねられんさぬ
集 浮舟のねざめられんさぬと白氏文集やうき
まめ人ハのちにみえたまひて
抄 薫之義
薫也浮舟 浮舟しくとみをさふ西乃とやまなり神之人
いとしのゝきぬさりて
浮舟 それくに思ふ心ハ浮とひとさみみとも
これぬハありそまぬまれ
抄 薫への返事之

義 川舟ゆこ日ほ舟れんとられかり薫と
ところぬさ浮之
女ゑりゆらりかとの済てれついてみ
抄 女二宮之義
なかしとりやみ浮しさんと
義 薫の親女二宮我あれつりとやみ浮
さんと由浮之
浮舟のみとし人の人
浮舟を女二宮ゆりしきれしあるさるや

ふかひかしのこと
まいれる人なりて足しつへんと
萬氏妻子なと代何かしのと申す
之まいれる人なりてはられつるの人也
うなりてと云之
くてみそてまつるには侍まて
箋 女三宮も人せしもむきたる花といひ
なし 須之
ありし人にまてしせさゝれし人のしくさく

傳般乃事也 女三宮も人世の人の中なり
なのりそえて着はすまくなりしへと
さくゆうあつくして之
いたれの事にてむとくみ
秘 む上臈しき御色養也 箋 案件有也
御あはれしおしき御にてこしめ御心にも人や
御らん
箋 女三宮の御心はさ御事なれは 中裏宮
人のあしき御にしてかしてはと之

侍りけるすゞめかれ

箏 又箏の明之内裏まいりて八さらしめ

入つき人様なりしめし給ふ

侍りき給ひ下さりけりしてんと

箏 三条まゐりて

侍りしくしすゞめさ

箏 中将障子之

この内記のまかへ人のとや

尋 大田花のまへりま之

箏 大内記清道之書の又大蔵大輔仲清之

の家人之

こゝつぎて家のくれなしさこしけり

箏 中大侍之てや 白象へ仕事のくれなしと

御随身ともの中に

流といかにちくめとの物なし

秘 白象之

いしねしさのさて

箏 箏の清きめとせへさしめされ給 白のさて

くろんと覚すへし
わか侍めのとの
白やんか侍乳母之
志かりうたにある成
下家如一
だいどしおやめしまうにてしまなあまた六
白のか侍めのとめ之らあわ何ゆまい八領
こまをとまうけ候てすこし侍のしめ候
此家をとまるへしあかりて白乳ほとこし出やうれ

右すへし
この月は侍こまりはかりて候へられハ
三月之 年 除日ヒくはかまとむへしはへし
谷りてそれ日
家あるしの大ゆるへる日の刈浮気とね出てへ
うはさんとや
こくにしおのていふとはりしまれハ
浮舟の乃もれとへきまふへし
大和原八ヶ月十日までもあらん

薫ハ卯月十日ニ浮舟をむかへんとや
ゆるすのかりけりともしらす
匂兵
毛ひめ薫ハ身をとられ事の秘として
されハそのあハいなんとしてせよ
秘
薫のすへきもよ覚へきんなれハさ
るよのあかりていつくへまてかきしと
義薫の出へしともにの落つかしと
はの清りきれたりしかりて
当流ゆかあかりしにも浮舟ハ仏帯をとき

なかのかみてまり
かねのかたりせんとさわて
浮舟ハかりも当流の女
はれそこちいかりみえへし
浮舟の舟ハ守流へまかせ
めくしたてく我かりくてハさりそく
まりの舟よかしに薫よりの衣裳をて
事に依る事に候しらし
むちかけあるとある人のよみと

浮雲の峯之絶まもあらハ世をいとふ也

まよハぬ事となり

松

白雲の出て後の人事ハなくしてなにま

しき事とや

白雲の峯ゆへいつれに事のいてこんと思ふ

まよハぬ浮雲の心を

あやしの浮人とそ

花

是ハ白雲乃浮事也

松

白雲の浮心なくてハいつれ浮まよひても我浮雲とや

八重たつ山本こえ行ても

河右

白雲のやへたつ山の峯に立

まかせてみぬまに世をへてもられ

白雲の八重たつ山のおくにも

そむかぬハたつ山のおくにや

浮の舟の心は　なほ山の白雲

事をいふ

私はいつ浮の舟にかへりてまた是ハ白

雲の浮かへの心をとらせるかさなき一旦浮の舟の

白へのくれなゐのえつまてともめへするわれ
かなへしいてやめて白ふ村ふききのく
うきさまりもの多へかいふれしもや
まへその話へかさと
桜
白より今自清玄なるしかしたかけ
ままもゆきそてをけり如画し
私共かれ胡ハ只の白え清海みのさゑと
いひ乃へさうや
なりとくまいあられ

清玄の物思ふゆへと無礼ふ返無礼胡と
なやましけふをさせなふとしえへ
まくり胡如へさくし無ふいひさうすなき返
いられなが清仏られも思へも
桜
自説懐姫なしまてかそ思へを　儀
りしやさ海りふきうしも
桜
懐姫ふハ多へうれ月もさうりもてん
山ふしまり語ハされくさ　儀
弁
清私のなやしなさと懐姫もやも無礼ふる

さて又月の事にはかりて西路を
海りしハこれぬきてハふかき海を
いひしや也
私云かくハあまたも月の比ハ事ならう
ままの事を自受のおくせしめへみつる
事みいひし之
かくそういふもれハかすめ之
弁　らうこ秘のす
私月のさうりなきの事かまたハかへし

義　又白氏清事なるしとも出たへし
有明の月をとも何ふなみさ
秘　枝れうけ海の時の事を出生する　義
あまた光もひいてて
義　弁尾なり
こゝめ光れ浄おりさ海
義　大勢なる
さかへさ宇しをあしいれかるし
経事し名かくも蔵しとめ心へかきる

あつらせ給ふとのにやかの人のいはれ
なりぬなるしらすあたら君達のまた
たえし御さましかハ
秘　弁のいふ故姫君のおりしまさぬ御かくれ
案　又れうちのやうに
中君の御事
いかにそめいはん人かく
秘　母の思浮舟をおもはし事と思ふ
思ふ身にかなふまき世のおハしますてく

案　薫の心のうちハ中君に対しても無之
我とのし思ひしまゝにこのをこらせ申ひて
案　浮舟に母の御心のしもとはしと薫あて
まさきよくて母の心のまゝにはしめあるよく
くるまのみ給ふ人にあまりハ
浮舟の君へたまへ事之
こにも心におもふにすましとこそ
とりハ
秘　京ハ浮舟の出給ふにしたかひてまかり

事ハありかしき
義 歎ハ宇治之
せられしも心のとられ
義 八宮大君なとの事也
たくしき身ものし
抄 弁か詞
義 弁か身代
こまやかみみきてまゐりきこえてきこえんと
侍りけし

大君なとの事と之ハ弁か身をいはれ
しく思て此浮舟ハ此のことをしく
せめけりをいふ弁か詞也
うちとけてかくせ給ひけりなと
義 浮船の事也とかり侍り弁か様なお
らん事をいへり
く侍もとめてかりしらくなと
宇治の里也此ききさい事をいへり
まめしらすおもしくおりもすへかる

敵乃

秘

蓮花事之くそ中さらや世しとこ

筆

蓮花をとりあす寞しさきとよ

たとへきぬしとこしときゆかし

弁

弁尼か娃をし八岩ろけなしと

思ひしみすてゝ

うきゝ身事やハ絲りまふそ

弁

弁か思ひし中やうさる御事

なりすていそ

花

子羅睺羅のおこりハ

耶輸多羅とハ燃灯仏乃御世乃

时瞿夷女と申し在也羅睺羅

乃まゝ女よとひ參れさとりと

ハ別乃因縁ありつゝもや志り

もとハ法華会上よいりて二条

成覚乃さとり成就ゆきて未来

の記莂をさけ給ひし时

我為太子時羅睺為長子我今成

仏在受法為法子と偈をとき給
へるにて佛乃法子とハいはれ
給ふを我子ありといふとは人
侍りや

箋

瞿夷此云明女　舍夷長者女長者
ノ名水光其ノ婦名餘明婦居近
城生女之時日将没餘明照其家
内皆明因立字云瞿夷即太子第
一妃之第二妃云羅云名耶　檀亦名耶
輸其ノ父名移施長者第三妃名
康野其ノ父名釋長者太子以三
妃故立三時殿
大論云釋迦文菩薩有二夫人一名
瞿毗耶二名耶輸陀羅々睺羅
母也瞿毗耶是宝女故不孕子
疏記第二云　大論十九云
耶輸陀羅菩薩出家時自覺有
娠菩薩六年苦行故懷妊亦六年

也乃今諸ノ釋有疑因テ佛還国羅以
一器百味飲食及歡喜丸以上於
佛ニ變五百羅漢ツテ与佛不殊羅云
送食直至佛所諸比丘空鉢而坐
答曰我身よとひをかさとりと
云ハ此事成へし羅睺羅の父を
とへども人をしねよさしにさし
て供養とかされしむしくかる
も實父と求り女ましといふ

也以上 義
答此さとりと云ハ佛法乃さと
りハ何つれ物我もまへ人覚
法智恵をいふ之
葉
たは何ゟかまれはどうまかしいかて
之しめもそても考へね我身を
花
葉乃んりとひ佛ならやうハ六条院
の侍子とふ人ハ何ともみまちといふ
こゝし死んと考へ之柏木の子とい

なんとする也ハ六条院乃法子なれ
つゐに世よ用ゐられ給ハす也又
なそ従きてあれ又抜り無始無
終の存理心地乃法門よ入るの也ハ
まつ身よしひきれ法ありとい
ふあり右意をうち樂文しらなく
ち此下よいふよつ井人とゞす
といふ家と法門よいひなせん継
能著者といふ家也

秘
出生以来乃事をいひきかする
人をたすくとうちいひなる
也

箋
薫乃一世此上段以て無為の生
死の無始する絶乃存理と法文
よ説して之西回ハ六条院の
法子る也ともに内境乃奥文子細
ありをかくれて薫此生家雑弁
しとよみつり凡夫は一切衆

生者かくのあらし
いふ事人もなし
秘 両句さうし法之付法といふて無
始以来生死のあり法無あ上之
花 誰能答者 箋
わが身よ法のあるかんもちして
花 法かとむ悪字の法かともむ人
の心のかたふ生をとめて病の心
也 箋

异 悪之所る人は病あるかん悪は虫也
名も食心臓らく
秘 文もかくさりれ法のさうをやめし
女ニ又之 箋
出のにたりあるあらそれなり
莫乃実又也まされたよさらり
のかうかもあうしよりかちる
色りとるく排意之莫志のんを
おかくさ治川為

女乃御さとり

義 おほときハ穏て

義 耶輸陀羅此云華色又云名聞
悉達ノ次妃ハ天人知識ス出家ノハ
為尼成正覚云々　名義集
女三宮俗諦し時ハ天人知識を
勝劣なしれよ似よる人にハ出家
の後耶輸陀羅乃如くよ悟り
成就ハし難ハさる人にこそ難うれハと

く法子此類乃あるハ似されとも
仏法の悟りを云ふ也
弄 五障
いつゝのなにかしも
抄 五障也さハりといふ物にてな
ほうしろめたき　餘情あるへ
あし
私 前乃巻よ志るしたと
河 かの名のありけんと
色去也　柳木ゆふえん燃ゆむ

秘
まかせのまゝ
柳葉之　箋 尋
世の人てとも多いめん
箋
世にも人てとく
私 薫一生涯比なりまし嫉に
あまりこけんて多り
関
あもちらの宮のはらさ陂
秘
今上ハ女三宮連枝まてまし
陶もあ之　箋 尋

きさいの宮かきひとりおもひあて
あからおあしく
秘
明石中宮之　箋
花
此貴きいの宮ハ明石中宮之ひとる
おもくハ御中将にわかく
六条院ありて　おもひそ給
事之
私 のわかハ明石中宮の宮
まからしひとりよおもひ出るを

すゑまでもまぎれて

秘 薫乃子と源氏の末しらしとも

院のおほしの御子を

箋 源氏せまぎれてハ薫也

右乃たぐひも

箋 夕霧也

むかし光君ときこえしハ

源氏乃事也

う稀に給はし人うちそひ

秘 弘徽殿大后二条大后乎比之 兼箋

おほしあらためし

源乃性氏也

箋 ありさめハ 容字之

箋曰素盞烏尊の悪事 日神

のまつりを敵対なくあらし

あらくなり源乃んならハ卒心（タイラアナルコロ）よ

容（ナダラカ）ナルト之

津のまにみしう世にたぐひなれとも

花
ここはかのみやこの朱雀院の
東なりし所にて六
条院と坊ありゐてありします
つ身はんひけのゐるといふ
なり
秘
左遷の身之帰京ありては恩
まて仇を報もうやりに定り
旅所のうし給もあ所いそり方
を全くし給へ家絆緒の事也

花鳥説いろ〳〵　箋 異
乃ち此世の法なめ
秘
落職の後は隠居し給へるよし
見ゆるをとゝのへし給ひすと
はあまし乃来をたこうり給は
さら所いそり　異
此乃君はまうしきよ
秘
業く　恭 巻 芳 声もえやくさ
これかとも

けにさるへくて
(箋) 薫と云因縁ありて世に出現の
人なる人しるしも
りなん悪に生まるゝとも
(花) 仏菩薩乃かりに託胎して人界
に生まるゝをいふ也 (秘)同し
香乃かうはしさそ此世乃にほひ
ならす
(秘) 大品経 九七 八十随形好云曰四十二者
毛孔出香気四十三者口出无上
香 (箋)

(箋) 聖徳太子ノ事 一抱太子数月懐
香故後宮争欲抱及妃亦加抱
異朝有例
遠くに百ぶの外も
(河) 百歩香
うち志のひ立よらん
(秘) 物のくまもしるきほのめき

うり常りとも
りはくまもと志げかりのめくさの
花 物のかくれも志らく木のまの月
のかれぬ似たるかしく 蕙乃立
よりいりる所ハ露ありても志う
さる人あまし身人え
秘 むさくともつをいりねと
弄 まかひみまもしいはりあも
弄 不自粧也

はうひりまうつまれゐふか
弄 蕙香はりりてなやしいりよ
とも也
そう川く袖のをゐよ梅乃香ハ
花 まれよ香の君おりかゆる花あれハ
おきうしはくよ袖あ迭也る
箋弄りく河よ二箭花よ今
一箭アリ不當の略し
箋 たるむく此詞心アリ

何心ともなくて

春雨のしづかなりと

(義) 兼りやわが宿に春雨の志つく

ともいふべし

秋はよやしみれ哉とて梅と

(同) やし春のあれ秋のよ

冬かやざさかし哉様るとも

りとのかりはくて

(秘) 句ひのかれ古様妙也

(義) 引寄せやし志る無をやしなひ

きしとさる人中の又多派

よへと云て共斉しりと吟

味ありて此妙処をいふべし

むひ風。句志しにおもしろし

(義) こゝには絶りしとかく深き打るべし

そのかりの手のまゝよ花

ともありき候也

人のとりも家居おもしろ

箋 河
梅花立よるはかりありしより
人のとかむる香にそしみぬる
まきれなきよしを志めし給ふ
花 うつしハ表きの物はいふ尋箋
秘 蕙物之　荷葉梅花なといふハ
也
春ハ梅の花をもて
是より苦郭公乃突にまかせて
多く事はた云

秘
蕙蘭綺すて
女郎花
卜立り給ハ
その字借て
後へまかへいて
只すの字
借へまて
花香の心ハ女郎花
吹まて　又万葉ニハ
秋田かるかりほの
庵ノ宇ゑイハへしハ
皆香才によう
てうくしらてを
乃てう女郎花
萩ナトハ栄菊
ナト花ノこくニ
白ひまきも
それハ心ツハツケ
給ハ紅ト思ヘまれ
されハトノ綴これ
ちりナトハ味ハの字
まてヨク
出まより
世乃人のめつらしきたんしき縁康
此つ月ホとあ荷萩の露
箋 女郎花吹過て来る秋風ハ
めにハみえねと香こそしるけれ
秋田かるかりほの宿のにほふまて
さける秋萩みれとあかぬかも
みやこ人ハよしあしとも夜こそまり
蕙草にハ何の縁かありて
給ハぬも　花香あり　柁きく給ん

うつろひぬるを文字を清てんと
うたしめたるといふハ非也
花をこそ菊にとこそいへあるか俗
みれ人の花咲こそといふ菊ハ
百年をかるか花あそをけるか
我以交有葉條物　老菊衰蘭
三友叢。　楽天
物まなつの遠もうらむとは
むさしの霧の遠にみしまれむかう

林しもおとは色ひまりなり
かれおとこりすらしたしいやハ
ら哉
白氏ハ風流めきさ躰に好文なれ
なりとも世間の人のいふも
むかし此源氏ハまへてうくなそそ
いはしの菁といふなあはれ
あまりここしく人の目に
まれ事を業としそちと

十分ならぬ義也 色人の曰く
めし
源中納言は此文まい
松
くわし 此文ハ句之
巽
薫 句ハ前ありまし也
まきとも
河
若菜
魚もとあ文
やんおとたり給也

わさとはかりつまて
箏
白文乃はかり也なるあやうハ
ろはとなし
おとにあるかまり
箏
詠文之 此巻ハ詠まの字あるまし
冷泉院の一宮也そ
箏
女一宮也 はは母ハ弘徽殿大后女
弘徽殿女とも 巽
いとし志はひとく

義 白文乃心

中将ハ世中をふかくあぢきなき
物なり

義 世のいとふ心ふかき世ハ見すて
うき世はすゝかしとありてき
はかとやかれんとの用心て
はしありてんかりしさむへきとの
たくさ程さうしなけりやうきもん

秘 草子地之

義 此以下の二段を草子地といふ説
あり不用説也ハ義中将の心中を
やうはいひのふ世をいひて
世をひとつしとふかひ志実ある
ものをいたてんの中にふ人がき
なりとて

人乃ゆるしなかりん

義 まして まりたくをむかんハ
あしとえ

十九はなりまふよし三位の宰相
なりて
秘 薫十四より十九までの事こゝに
見えたり次乃巻ハ又立入り
て先年の事なり 薫昇
紅梅 次の紅梅巻ハ又立入りて此巻
の事也。但並たる巻は年紀の
雑乱多端也
此昇進のわかき三位中将なるべし
宰相より任して宰相中将は
なりぬべし

みしときゝし他乃はかりそうすし
今上ハ薫の伯父明石中宮ハ
姉の宮
まうと人おゐては
乃倍 日本紀 乃人 トモ去
身をおもひしる
実父をあかしかに志りぬるも

とのはらからをまとけるか
秘 柳朱此事心りあるによりて
心操もとのつゆ実清よ凡て
給人ぶ也 箋
三乃宮の
句ぶ也
院のひめ君此はあかり
冷泉院の女一宮之
ひと行院のかうり明くせ

花 薫と女一宮と冷泉院よ立まれ
給ふ也
秘 うれ冷泉院よのこ給ふてひ給ふ
也 弄
箋 此世うんしむつくいいさかるを
やうあれん人ぼして
えてそれうりてかきも也
ひめ宮乃佐うさ南の座てれい
箋 抱ふくれりし南手すさ波斉持之

まじらひ

〔河〕交参（ミシワイ） 日本紀

まじく人なりめでてまじんやむなり

語へなか

〔秘〕天然の風情ある人とまじはりをやと

おもなれり思ひ京も花からんさ

りとも世俗にとあ語はさむべし

〔箋〕叢の身にも自然とあいもの桐の

生れつきも也へたりまく人なと

云これぐ

〔弄〕わりのすべ但心なりめでて

まじんと十ままにわりれ自然の

風流く

人のなるめありふとくしく

〔箋〕きこそ叢の情をも思ひ京と人

の知やうかも考すし語り年経

まれ時あつし語りなる

いさあられ

弄
薫よん紙ノ綴にて　　引導
三条家よまつりあけまたは
箋
薫人をひられ当人ハ我らの亡く
かゝりさそられて母家のはゝ人
家法人よおもらんてれあるとも
つまるれとみるも
箋
三条家はさみうとそとおとれ当
筆ある者れハ珠白んやまし筆とも
はもあるまじきことなれ
弄
近衛どの人く
又家たる人をましき人かるとも
方成さけて宮法人よ学ぶれ
さみすゝにつとめりけり
箋
わかれ温和の法り備へたる人
あれハ赤むふかも悟ハ至りつへし
んはたりぬ
秘
かひあれあるとぞ取るへし
家のおこりしまりさん世の御りにて

秋

女三宮之蕙乃心中まかりうち（弄）

はらんせう思見えてまいらんと

ふたたび見しの歌へと

（箒）此時めつらしき筆法の心まへハ

ところまいさせすらにと奇此時へ

うちそて見えし

右此たとも　夕霧之

（箋）道より又名別のすくされとも

もの字まても時ならうまり

あまさりのむすめ

（花）太のたきまは女をかれふに

まうかりも世にはりあらハ

やうすすちも

（弄）以思をもありつきんの心

はもとうに後しけるに歌

（花）いはまでも夕霧乃とあきぬ

は中と云

（弄）夕霧の弟あふかりハ少将へ

風んおこるなれりとも

秘 雲井鴈腹といへり

一条宮乃さまあつかひくさともなりて 弁

秘 落葉宮之

箋 御子也おもき也給ハ筆の義也

弁 落葉夕霧の六君を養し給也

いはくちりハあれそおもし給のも

花 さ乃をおくわうりいろうかうハあれそ

あし給ひて君をちゝハ何さ

とんなくて見捨てそましハ後

秘 かりくあすも

さ給をおしぬりおもすし給ひも

弁 普通乃いけくうさをハとくし人

あし給のとしも

おとにくをして人乃かんをよ

せんとも

箋 いはくり貴ハ厳儀乃心今めかく

おうしこしあまいハ古代のあため

りしき模様なとありて花やかなるよ
人のかうこそねたくしみせ
手をたゝ人しものこそおもは
男方にも代りて之
のりゆみのかへりあるしのまうけ
六条院にて

抄 薫大将の正月之
此時夕霧右大臣にて左大将を
かね給へし

寄 かほり十九にて宰相中将を経
て翌年中将の春のすゑ
花宴十九歳といへる也

河 かへりあるし
あるしといひて 還饗 今まて

賭弓 清和天皇貞観二年正月
十八日始し
賭弓ハ天子弓場殿に幸して
弓を御覧ある也 仲春の月弓を

是の事礼記より出たり
四府（左右近衛 左右兵衛）舎人射し左右大将
射手の奏ある事なくて後
大将射手に饗をたまふ人衛の
管領たるゆへ也

花

正月賭弓ありてかちたる方の大将里
亭にして還饗といふ事を
行ひし也 此時夕霧右大臣左大将にて
て六条院にてこれを行ひ給ふを
方の人ハかちしハ早出なる例
也けり宰相中将ハ右のまゝを
うつしゝ。

筭

礼射ハ往古の義あり
射礼（じゃらい） 正月十七日或三月十三日 於建礼門被
行し 観射トモ云
代始 豊楽門院 経建礼不老門 御清暑堂
弘仁二年正月始し
賭弓ハ 正月十八日 或延引十八日

於弓場度被行之　四府舎人射之
大蔵省　進昨日ノ射遺賭物（ノコリノカケモノ）
出居次将着座　出御　警蹕
次将召王卿々々着座　取弓矢
大将進奏文　置弓挿矢腰取奏杖
御覧之後（今日射手二六人各之）大将以文給一座上卿之
召左右少将右ノ奏ヲハ左ヘ左ノ奏ヲ
ハ右かねニ給　以懸的（木工）　籌判着
次射　矢取渡面　延喜式　人数ハ
左右近　各十人　兵　各七人　勝方将行
罰酒　十度射之　王卿愛童　内膳
次供御膳
御簾中先供御膳　射手出袖
跪居供之立　勝方乱声
次舞　持射時左右共ニ舞
的付将ホ　賭度数　（羅陵王　納蘇利）
文付上卿　勝方大将奏可終禄宮中
持之時ハ不設

久しあるハ還答之
勝方の大将次将引率して里
方よそ引し出て鋪に附申障ッ不
条等依右条入早出乱之こと
久りあるしという事ハ相撲なと
あるし
同
後撲ハ相撲の久りあるに
如此御恵をもてあるし此時
りきしまきすとて

三条右大臣
同
るとまてしかの答ねかハ
何かハ君か切しみとせん
相云久りあるし乃かのりら此
後大将方の立けとりて我亭
まて饗し乃答儀式ありある
しとハ饗と云字ハよみり又
亭と云字ハ極仙露にありやと
云よみあり 仍吉事にハ此亭の

字決疑抄一方此まけとゝ名た
大将なりしかた中少将右大将す
ハ大中少将これ也

河
還饗

北山抄曰賭射還饗大将先着座
垣下座也 儲営円座親王未着者以将上
次将着奥座 賭弓ニハ不儲土敷円座依茶卒
之相撲時敷上敷円座或莚上敷也
次垣下公卿着座相對次将次立机
或次将机先立

三献訖テ有絃歌之曲給禄有差或令
東遊将監以下舞 天禄例也少将陳擁
相撲之時三献之後亦次将召相撲人ホ
少将用作半番ニとも少将陪擁召相撲所
将監作之教巡之後有相撲布引

河
延喜三 正十八 御記云賭弓訖左大臣向其
射所左近官人以下算賭弓勝寧坐

甚亭ニと

きはいえりのはいつまとも同しく

秘
明石中宮の法服也

見ゆるをりしもよハ禁中へ参
らせ給ふ御ことにしもあらん
まいりたまふらんにや絶やましく
秘
此物語后忠よりいはん事大略
左勝之絵合韻ふくさ諸左の絵
也さてまいのとかり 弁
箋
凡物合ハ皆左の勝とかくとさされ
た新合と前一乃為勝の字かく
付ら候哉果ともこの物語にも絵合

韻ふくれ各左の絵之絵まいは今
多合乃例よ任て例といへり
とく事いはぬ大臣まつて給
夕霧左大将
箋
弓場殿乃儀事毎々こそあるし
の時奏して退出定まる儀之
其乃文常陸文信くしの五乃宮
旬 常陸 四文 五文 中務口 明石中宮服
宰相中将ハ

秘
薫ハ右大将けるこたちのおほくくり
あかしの亭へハむつかさ之　弄
あしらか
秘
車之
此子乃参門督〔嫡男 母三条ノ上〕　権中納言〔二男 母藤内侍〕右大弁〔三男 母三条上〕
弄
夕霧乃君たち之
ちかき孫おほしめしかしこに
義
くりあかしに結弁あり
律子乃おとゝみなとむさきり中かね

つきあかり
花
ひさしの庄中かね奥乃方り　河如常
つき親王乃ハ端りけく見とい
垣下の庄といふ中将を客庭
もらす諸律のな之　弄
さんりのみこ
河
垣下えんり代えとまあり
秘
垣下之諸律之
りしあこまゐて

秋

風俗乃やまとしめはけるかんこと

はなうた　義

くらあかしの時うたはしめ給ね

延以下歌之

河

八乙女　風俗二段　拍子各六合十二

庭をとめハもちやをとめをとめか川

やハ乙女多かりやし乙女

二段

神のまへにこ此清社よ

神此庭をもろふて多ね方読

求子の歌　拾遺集

ちし絶て年経りし男使させて

てし时うらふつまもしてそ

よみ人家

大中臣能宣朝臣

子ともや幾年野の松の枝さへ

千世も八千代もえハかはらし

かく出るすゝし

河 花
ひろく人の心也
かゝるハ神よ祈るかへしと
くりかへし此時求子歌盛ハ下
舞也
弄
舞此さ夜明之神事乃舞此
すゝく
風にハあやなく心はしるし花種有と
香ふくそまに納めなりけれ
河右
春乃よ乃やミハあやなし梅花

色こそ見へね香やハかくるゝ
秋霧之
山の霞り文ハまうたね挟む
くにゝそれあるか拘るうまれ
秘 箋 弄 皆男女前
くれ乃さ夜も夕くれハ清ら
あかねさし女房乃いふ也
みな出ぬさ夜なり
花
くれる志けり押りしらと
いふ也

右乃すけと
(秋) 夕暮れ初萩はまけりとなし迄と
この亭にては別してとりわり
きゝきこと事あれ之 義
(判) うけよりきりしてこ之
歳らうとあはしや
客人めきたる之
おくりぬかしに秋乃まけなと
(両) 一方の大猶なくありしれ日風俗の

秋乃まもとしみ弁とらうと
定まらす之
(苑) 秋の歳もハ求子れ二殿之右乃
まけいかの都くしまう之
此哥ハ葉下巻れあわし
筆法也
(判) 秋乃ます
来変み雲風俗と　求子弁
なし　葉下乃終のあらし

秘

神のますハ求子第二段のたゝし
めなり
或とハ例の作者乃詞也
若菜下海ひあされのとゝ第り
箋
筆法よあ所々見え
八乙女乃二段め歌乃あるの助音
たり
・・
河海云入りあるし乃日一方乃
大将風俗此神のますと以ふ

前をうるふ事侍さまあるよ
也云々
或と作者此詞也
箋曰清といふ説たりあるよの
詞乃中に入りあるし此一云
の儀式者乃詠揚以下のみ者尽
し養尽くをりと推量ルへし
箋曰源氏一部のうちよあ此内よ
若菜此下巻と此巻のうちよあ

と一つくむ妙也云く